

兵庫県の西部、岡山県との県境近くに、2009年4月、佐用町昆虫館が開館した。敷地面積942平米、述べ床面積165平米、山の麓の谷間にたたずむ、小さな館である。37年間の歴史に幕を閉じた「兵庫県・千種川グリーンライン昆虫館」（兵庫県昆虫館）の建物を継承し、町立の施設として開館したものだ。建物の外観は以前とそんなに変わらないが、運営のしかたは大きく変化した。佐用町の人口は約2万人、小学生は1,000人ほど。小さな町の小さな昆虫館が生き残ったプロセスを紹介する。

万策尽きた昆虫館

1971年に開館した兵庫県昆虫館は、財政難・人材難・施設の老朽化を理由に、2008年3月をもって廃止されることになった。昆虫館は、健康増進を目的とした構想に基づいて設置され、教育委員会体育保健課が所管していた。畑違いの県当局は、管理運営を、事実上、元教員で植物研究者である内海功一前館長1人に依存していた。廃止前の数年間、県は、行革の一環として佐用町に昆虫館の管理運営を委託し、町が継承するなら施設を無償譲渡するとしていたが、町には人材もノウハウもなく、合併の後遺症で財政は厳しい。存続を求める住民の請願もあったが、議会はこれを否決し、廃止の受け入れを決定した。2007年秋のことである。昆虫館は、もはや静かに幕を下ろすしかない状態となっていた。



昆虫館付近の風景。のどかな山村

よそ者が動かす

昆虫館廃止の報に接した竹田真木生・神戸大学大学院教授（昆虫学）が、館の存続に向けて動き出したのは、廃止の段取りがすべて整った、2007年11月下旬のことだった。

竹田：八木くん、何とかならないのかね。三重県立博物館で子供の時に大きな影響を受けたものの一人として、博物館はどんなスケールであれ大切にするものだと思う。できることがあれば何でもやるつもりだ。

八木：時既に遅し、かもしれません。可能性があるとするれば、徹底的ボトムアップで、NPO作ってシテカンで受けるしかありませんね。でも先生、かなりの覚悟、いりませ。

竹田：やろうじゃないか。

昆虫館の廃止を惜しむ声は各方面からあったが、旗を振る人がいなかったのである。竹田教授が先頭に立つことで、運動体の核ができた。

廃止決定を覆し、新しい昆虫館をつくるためには、説得力のあるプランをつくり、仲間を募り、行政、議会に納得してもらい、地元の理解を得る必要がある。急ぎ、いろんなルートで町に接触し、提案書をつくって町に提出した。同年12月末のことである。平行して、昆虫の関係者、自然観察などの関係者に提案書を配布し、NPO法人設立の発起人を募った。

翌2008年1月9日、庵途（あんごこ）佐用町長と竹田教授との面談が実現した。この頃にはNPO法人設立発起人は



昆虫館の全景。山の麓にあり、すぐそばを谷川が流れている。夏にはゲンジボタル、ヒメボタルが飛び交う

「秘密基地」としてよみがえった佐用町昆虫館

NPO 法人こどもとむしの会・兵庫県立人と自然の博物館
八木 剛

60名近くになり、町長は竹田教授の提案を受け、「具体化に向け、町行政としても（NPOと）いっしょにやっていきたい」と述べ、急転直下、存続へ向けて、物事が動き出した。

虫に合わせた季節開館・子どもに合わせた休日開館

提案書では、機能面、施設面、運営面で、これまでの館と大きく変わることを強調した。まず、新しい昆虫館のターゲットを子どもたちに設定し、体験学習機能を前面に出すことにした。あわせて、コスト削減を考えた。廃止前の兵庫県昆虫館の年間予算は500万円程度だったが、方針転換による逆風の中で、これに近い予算はとて捻出できそうにない。そんな中で、我々は、魅力ある運営形態を提案しなければならなかった。

具体的なプランとして、第一に、開館日数をざっくり減らすことを提案した。まず、4月から10月の季節開館とし、昆虫と同じく「冬眠」することにした。冬眠するなら、これまでのガラス温室は無用のものとなる。温室は、冬期に昆虫のエサとなる植物の栽培に使われていたが、県の撤去費で撤去してもらい、広場とした。これで、ワークスペースを確保でき、温室の維持管理費用はゼロとなる。しかし、これまで30有余年にわたり、温室を維持してきた内海前館長の想いは複雑である。そのため撤去工事前に「がんばれ昆虫館セール」と称するバザーを開催し、温室で栽培されていた植物をお



「がんばれ昆虫館セール」のようす。温室で育てられていた植物たちが引き取られていった

裾分けした。イベント開催には、地元自治会も大いに協力してくれ、何より重要な、地元との信頼関係を構築するのに役立った。

加えて、平日は閉館することを提案した。これにより、2009年の開館日数は年間70日となり、一般的な博物館と同じだった以前に比べ、ほぼ1/4となった。

このような変則的な開館では、年間を通して生きた昆虫を飼育展示するのはまず不可能である。そこで、飼育展示する生物を、週1回の世話で維持できる種に限定し、生体展示水槽を半減することにした。不要になった水槽は廃棄し、展示通路の壁を撤去し、館内部と外周展示通路を一体的な空間とし、これまで立ち入り禁止だったバックヤードを、来館者に開放することにした。そもそも、4月から10月の間は、何もしなくても敷地内にさまざまな昆虫がやってくる。漁港の市場のごとく、その場で見られた昆虫を連れて来て、閉館後に放してやればよい。

佐用町は、これらの提案を全面的に受け入れ、2008年10月、佐用町昆虫館条例を制定し、同時に施設は県から町へ無償譲渡された。NPO法人こどもとむしの会は、2009年3月の町議会で指定管理者に選定され、指定管理料予算は、ほぼ予想通り、年間200万円弱となった。

「一日館長」が運営する秘密基地

館の展示もみんなが持ち寄って製作した。最後に残った問題は、日々の運営を、だれがやるかである。法人内部ではさまざまな意見が交わされ、地元自治会とも本音で意見交換した。しかし、春から秋まで、土・日・祝日だけ働いてくれる、即戦力の人材など、いるわけがなかった。つまり、自分たちがやるしかない。将来



春から秋までの季節開館となり、撤去された温室。現在は「おにぎりバクバク広場」

的にはスタッフを雇用するとしても、まずは、自分たちの館を自分たち自身で知ることが、何より重要である。また、多くの会員が館運営を経験することは、今後の経営に必ず生きてくるだろう。そこで、「一日館長」として、正会員が交代で館に詰めることにした。一日館長やスタッフは「ボランティア」とし、旅費と日当は支給するが、賃金は支払わない。

佐用町昆虫館の「小ささ」と変則的な開館形態が、一日館長による運営を実現可能にした。しかし、多くの「ボランティア」がそうであるように、このシステムが笑顔で継続するためには、さまざまな困難がある。

困難を克服するためには、第一に、ミッションの共有が重要である。穴場的な小さな館、手づくりの館、このような特徴を共有するため、佐用町昆虫館のキャッチコピーは「こどもとむしの秘密基地」とした。みんなで作ってみんなで遊ぶ、来館者にとっても、スタッフにとっても、ちょっとわくわくする秘密基地になればいい。

第二に、経済的な負担の軽減である。NPO法人こどもとむしの会の正会員会費は1万円/年で、もともと志の高い人が集まっている。一日館長やイベントスタッフには旅費と日当を支給するので、2、3回スタッフをやれば会費の元が取れる。また、平日の利用は自由である。名実ともに、みんなの手で運営する館になればいい。

第三に、将来展望である。博物館は冬の時代だ。施設面、人材面で、構造的に高コストであり、行革の矢面に立たされる。博物館かくあるべし、も重要だが、新たな展開を模索してゆかなくては、社会からその存在が消えてなくなるかもしれない。冒頭の竹田教授の言葉を借りられ



昆虫館の展示は、すべて会員が持ち寄って、新たに手づくりした

ば、博物館はどんなスケールであれ、そこにあることこそが、重要なはずだ。「秘密基地」が「道の駅」くらいに増え、既存館とのネットワークができれば、虫好き、生き物好きの子どもたちにとって、すばらしいインフラとなればと思う。

大海原に漕ぎ出した小さな昆虫館に、どんな荒波が待っているのか。今後注目いただきたい。

(やぎ・つよし)

* NPO 法人こどもとむしの会

<http://www.konchukan.net>

KON-PASS (こんちゅうかんパスポート) をつくりました。



NPO 法人こどもとむしの会が、花王・コミュニティミュージアム・プログラム2008の助成を受けてつくりました。A6判33ページ。パスポートといえばスタンプ。集めるとなぜかうれいす。そういうえば、たいの博物館にスタンプありますよ。せっかくだからおすすめ施設のスタンプを集めて、Webで紹介してみよう、ということになりました。ぜひごらんください。

<http://www.konchukan.net/kon-pass>

KON-PASSは、佐用町昆虫館の紹介を兼ねて地元小学校に配布しますが、残部は1冊200円でお分けします。



足の踏み場もなかったバックヤード(下)は、水槽と壁面を半分撤去して「スタディラボ」として生まれ変わった(上)

